

コミュニケーションゲームワークショップ

OEP(アウトドア・エデュケーション・プロジェクト)

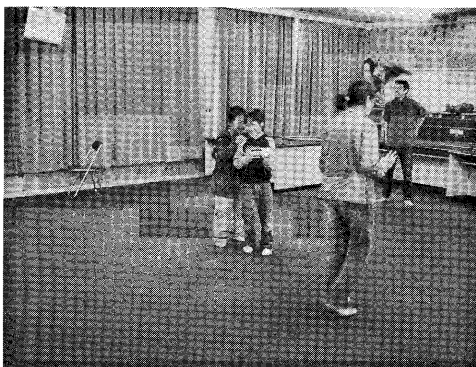
参加対象者を中高生にし、ゲーム（遊び）を通してコミュニケーションを学ぶワークショップ形式で行う予定でした。しかし、中学生3名しか集まっておらず、予定していたものができず内容を変更しました。



まず、緊張をほぐし楽しい雰囲気、肯定的な体験をしてもらうことを心がけ、ファシリテーターを含め4名からはじめました。参加者の服装が運動しづらそ

うだったので、2人組みの動きの少ないゲームからはじめ、参加者の様子をみながらゲーム内容を考えることにしました。参加者の顔から緊張の色が取れ始め、積極的に関わる姿勢が見られました。導入部がスムーズに行きホッとしました。そのうちに、小学生3名、大人1名が集まってきました。

人の小学生は、最初はゲームの輪の中から離れていましたが、徐々に参加するようになりました。次の



のゲームに移る時は、みんなから離れて、ゲームしている様子をしばらく眺めていて、途中から参加します。輪の中に入ると積極的に声を出したりしていました。小学生が加わった後は、ゲームも徐々に動きの大きいものにしていきました。

後半は、コミュニケーションを学ぶゲームを行いました。バンダナで目かくしをしたり、言葉を発してはいけない（ノンバーバル）などの条件の中で、様々な課題解

決を行いました。最後にふりかえりを行いました。

参加者は楽しい時間を過ごせて満足そうでした。ふりかえりの中で、中学生が日頃の具体的な人間関係の悩みを話してくれました。コミュニケーションについて学んでもらうという面においては、不足したところもありましたが、中学生の一人が「久しぶりに（悩みのことを忘れて）心から楽しめてよかった」と言ってくれました。この子ども達にとって意味のある時間をできたのではかと思います。この分科会では対象外であったが、3人の小学生の参加がありました。親が分科会に参加する為、子どもを預けるという形の参加でした。子どもの親は、「他は難しそうなのでここに連れてきた」ということでした。フォーラムに来た子どもは、必ずしも強い動機は持っていないと思います。そういう意味でも、今後はこのような「遊べる」分科会も必要ではないだろうか。（参加者人数：7名）

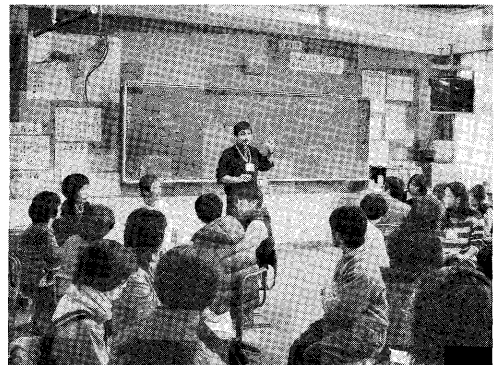
親が変わる・教師が変わる、それが出発点

—アドラー心理学育児プログラムに基づいて—

子どもの人権を考えるグループ モモ

■分科会のねらい

「グループ・モモ」では子どもとのよりよい関係を『子どもの人権』という立場で考え活動してきました。活動する中で出会った『選択をうながすコミュニケーション教育と、罰のない育児』を提案するアドラー心理学の育児プログラムの提案を、分科会で紹介したいというのが今回の趣旨と言えます。

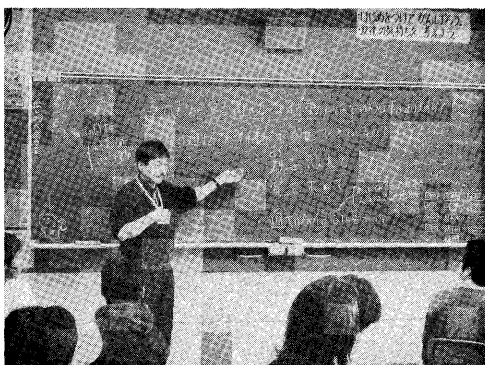


この育児プログラムに沿ったロールプレイを体験し、家庭や学校の中での日常的な子どもとのやりとりを見つめなおしてもらいたいと思いました。頭では理解しているはずの子どもの人権擁護という理念ですが、では実際どういった行動をとればいいかに戸惑うのが私たちおとなの正直なところだと感じていました。この疑問に答える具体的な実現方法が、アドラー心理学の育児プログラムにたくさん提案されているということを子どもの人権を考える場に提示したいと強く思い、この分科会を企画しました。

■分科会の流れ

午前は『子育ての目標』、午後は『賞罰のない育児』をテーマにして、ロールプレイやグループディスカッションを取り入れてワークを進めました。

午前の『子育ての目標』についてのグループディスカッションでは



- ・どんなおとなになってほしいと思いますか？
 - ・気になっている子どもの行動はありますか？
 - ・どのような対応をすれば目標に近づけるでしょうか？
- などの話しあいをしてもらいました。

午後の『賞罰のない育児』についてのグループディスカッションでは

- ・子どもの適切な行動にはどんなものがありますか？
- ・その行動はなぜできていると思いますか？
- ・罰を恐れたり、賞を求めたりしての行動だとどうなのでしょう？

などの話しあいをしてもらいました。

午前、午後ともに、話しあった各グループからの声を聞いて講師の中島弘徳氏がアドラー心理学の育児プログラムが提案している対応を紹介し、またグループでその対応についてディスカッションしてもらう形のワークが進められました。

■参加者の感想

参加者のご意見を聞きたかったのでアンケート協力をお願いしました。30名の方が記入してくださいました。それぞれのご意見を読んでもみると、一般の講義形式でなくディスカッション中心のワークが好評だった事がわかります。主なものとしては

- ・親や教師が変わるという発想に興味があったので参加しました。
 - ・質問の仕方が大切だとわかりました。
 - ・自分の話し方がどんなに相手の心を封じ込めていたかわかりました。
 - ・グループに分かれて話す抵抗がなくてよかった。
 - ・心理学に興味があつて参加したが、いろいろな人と話し合えてよかった。
 - ・グループで聞き方体験をすると、聞かれる側の気持ちがよくわかりました。
 - ・よき人間関係は聞き上手になることからと思いました。
 - ・実践が参考になったので今後の人間関係に生かしたい。
- などがありました。



■企画者のふりかえり

午前午後ともに、40名を超える多くの参加者に来ていただけたことはうれしいことでもありましたが、同時に子どもとの関りに心理学の考え方をとり入れたいと思っている方が予想以上に多いということでもあったと気づきました。また参加者の反応からアドラー心理学は現実の暮らしの中で実践することで、子どもとの人間関係を変え、信頼関係を築いていく力が強いとあらためて実感しました。アンケートの答えの中にあった「我が子との関り方について情報は多様にあるけれど、さて具体的な日常の出来事の中で実際どのように行動するかが勉強できたら、と参加しました」との声に、今後こうした育児プログラム講座の必要性が高いことを再認識する次第です。

(参加者人数：午前 42 名 午後 47 名)

子どもの SOS を受けとめる・支援できる社会を

－交流しよう！まるごと子どもの人権オンブズ－

(社)子ども情報研究センター

ゲスト：吉田恒雄さん（埼玉県子どもの権利擁護委員会・権利擁護委員）

竹本康一郎さん（元川崎市人権オンブズパーソン・事務局員）

石田文三さん（川西市子どもの人権オンブズパーソン・オンブズパーソン）

進 行：田中文子（子ども情報研究センター所長）

ユネスコは、「Child Friendly City（子どもにやさしい街）」という視点から街づくりを進めていこうと提唱しています。日本においても「子どもが安心して住める街」をめざして、子どもの権利救済のシステムづくりに取り組む自治体が少しずつ増えてきています。すでに取り組んでいる3つの自治体の関係者を招き、「子どもの人権オンブズってなに？」「子どもオンブズのしくみは？」「子どもオンブズをつくりたいけど、どうしたらいいの？」「オンブズを利用してどうだった？」「子どもオンブズで大事にしたいことは？」等々を交流しました。

■ 3つの自治体の子どもの人権オンブズ

	川西市	川崎市	埼玉県
人口	約159,000人	1,281,706人	7,056,450人
18歳未満の人口	約26,000人	207,966人	1,239,838人
救済機関名称	川西市子どもの人権 オンブズパーソン	川崎市人権 オンブズパーソン	埼玉県子どもの権利擁護委員会 (子どもスマイルネット)
設置根拠	川西市子どもの人権 オンブズパーソン条例	川崎市人権 オンブズパーソン条例	埼玉県 子どもの権利擁護委員会条例
活動開始年	1999年6月	2002年5月	2002年11月
設置場所	川西市役所	川崎市 男女共同参画センター	県庁舎別館 (他の若者関連機関もある)
活動日	月～金：10時～18時	月水金：13時～19時 土：9時～15時 火木：9時～15時(予約相談)	月～土：9時～20時半
スタッフ	オンブズパーソン3名 (週1日) 調査相談専門員4名(週4日) 事務局1名	人権オンブズパーソン2名 専門調査員4名 事務局3名	委員3名(月2日) 調査専門員3名(週1日) 電話相談員8名(週3日～4日)
所管	生活・人権部人権推進室	市民オンブズマン事務局	健康福祉部子ども課
連絡先	072-740-1235	044-813-3113	048-834-8755

午前の部は3人のゲストスピーカーから、「なぜ、オンブズができたの」「どんなSOSがきますか」「どのように支援していくのですか」「オンブズにかかわって、今感じていることは」の質問に答えていただきました。それぞれに特徴があることが分かりました。 午後は、参加者全員が輪になって座り、交流しました。

参加者は、兵庫、大阪、滋賀、和歌山、東京、埼玉、広島、三重、などから、学校、自治体関係者や、チャイルドラインなど市民活動をしている人、自治体に子どもオンブズをつくりたいと取り組んでいる人、オンブズを利用した保護者や子どもなど、様々な分野ではあるが、思いを持った人たちがたくさん集まりました。



「誰にも言えない」「我慢している」子どもの存在、市民活動で「初めて言った」と打ち明けてくれた子どもに出会っても解決に向けて信頼してつなげるところがない、「先生をやめさせたんでしょ、というようなオンブズへの誤解」「オンブズにも相談せずに苦しんでいる親子の救済は?」「ほんとうに子どもの声を聴くってむずかしい」等々、つぎつぎと発言が続きました。

川西のオンブズを利用した方から、オンブズに出会って元気になった子どもが、友だちが苦しんでいるのを知って、友だちのことをオンブズに相談したことがあった、との発言や、オンブズに支えられているとの先生の発言もあり、子どもの人権オンブズは、制度ができたらいいということではなく、できてから、それを活用していく人から人のつながりのなかでこそ充実させていくことができるのだと話し合いました。

(参加者人数：65名)

参加者からの感想

こんなにも活動範囲が広がるとは思っていませんでした。

私たちは、近鉄で大阪まで行き、それから電車を乗り継いで…。やっとなつた川西小学校があまりにきれいだったのでびっくりしました。

分科会は、どれも興味があつて迷ってしまいましたが、午前中は「新聞から読み解く子どものイメージ」という分科会に出ました。そして午後は、「しゃべり場」に出ました。

「新聞から読み解く子どものイメージ」では、緊張もせず与えられた新聞の記事を元に意見を出し合いました。いつもは発言もあまりしませんが、結構自分の言いたいことを言えたのではないかと、と思います。記事が少し難しかったけれど、自分たちで分析することが楽しかったです。また、同じくらいの人たちの記事に対する意見なども聴けたのでよかったです。

私は少し新聞を読みますが、記事についてあまり考えずに読んでいるので、いろいろな見方、考え方を知り、これからは自分なりに新聞を読みながら記事の意味を考えていきたいです。

「しゃべり場」では、少年犯罪についてしゃべりました。

私と同じぐらいの人が、罪を犯しているということは考えたくもない話です。

最近私は、大人の目を気にします。なぜなら、中学生が起こした事件を最近よく聞くからです。私の周りにも、事件を起こしてしまう人がいるのではないかと……。と思うことがあるからです。

犯罪は許されるものではない。だから、年齢で罪を軽くしたりするのはよくない。私はそう思います。いつ、どこで、だれが、何かを間違えて、罪を犯すかもしれない。それは自分かもしれない。いろいろ考えても限りはありませんが、少しでも間違った方向へ行かないようにするために、自分たちが心がけることが必要だと思いました。

子どもの権利条約フォーラムに参加できて、とてもよい勉強になりました。残念ながら、日曜日しか参加できなかったのも、どんな活動をしている人が集まっているのかわかりませんでした。また、情報交換なども出来ず、悔しい思いをしています。今後、どのような形で体験したことを生かせるかはわかりませんが、これからもっと積極的に、そして活発に、いろんなことに挑戦していきたいと思っています。

【NPO 法人 こども NPO (名古屋) 藤田真利】

ぼくは、「子どもの権利フォーラム 2003 in かわにし」に出席して、たくさんのことを学びました。

ぼくが出席したのは、午前、午後ともに「しゃべり場」でした。しゃべり場では、三つの事を話し合いました。

一つ目は「理想の学校」。理想の学校については、たくさん意見が出ましたが、ぼくの心に強くなった意見は、「校則が少ない」や「先生が生徒の話をまじめに聞いて欲しい」などでした。

それはなぜかと言うと、ぼくの学校は校則が厳しいからと先生が真面目に聞いてくれないからです。

二つ目の議題は「子どもの居場所」でした。一つ目の議題で強く心に残った意見は、「今は子どもがのびのびと遊べる場所が少なくなっている」や「今は昔と違って子どもの考え方が変わってきている」などでした。それはなぜかと言うと、自分もその意見に共感したし、たしかにと思うふしがたくさんあったからです。

三つ目の議題は「少年犯罪」でした。この議題で心に強くのこった意見は、「子どもの居場所が少なくなっているから、少年犯罪が増える」や「子どもはストレス発散の仕方がわからない」でした。なぜかと言うと、たしかに自分の居場所は少なくなっていると感じるし、自分もストレスの発散方法がわからないと思ったからです。

ぼくは今回のフォーラムに出席して、子どもの居場所が減ってきていて、そのために少年犯罪が増えてきているんだなあと思いました。

今回の経験を通して、自分で自分の居場所を見つけないといけないと思いました。

【NPO 法人 こども NPO（名古屋）勝呂英之】

自分はこのフォーラム関係のものに初めて出ました。会場に着き、少し緊張しながら皆と歩いて行きました。中に入り、6人のメンバーは2人ずつに分かれて行動することになりました。

自分は午前からの「しゃべり場」に出ました。教室に着いたらもう始まっていて、後からグループに入れてもらいました。

最初の議題は「理想の学校」とは？でした。自分は「先生や友達などの他人から認めてもらえる事が出来るのが理想だと思う。」と言いました。他の意見は、「校則がなくなれば」「私服がイイ」等色々な意見が出ました。でも、こういう自分勝手な意見は自分たちがしっかりやっていたら自由になるんじゃないかな？と思いました。

そして次の議題は「居場所」についてでした。その議題を聞いた時、少し考えさせられました。心の底から悩んでしまいました。なぜかと言うと、それは人それぞれ違うからです。当たり前のことになんだか悩んでしまいました。その他の意見は「学校」「家（部屋）」などがありました。

最終議題は「少年犯罪」について。これは最近は多く起こっていて、今までのどの議題より皆がどんな意見があるのか興味がありました。自分的には「これは色々悩み、いじめから来たり、ゲーム感覚、ストレス発散方法がわからない等の事から来ていると思う。」と言いました。他にも「子どもの居場所が少しずつ減ってきている。」などの事を聞きました。

この「フォーラム 2003 in かわにし」に出て、子どもと大人が年の差関係なく話せて色々な意見を交わせてとても良かったです。

【NPO 法人 こども NPO（名古屋）野田明宏】

わたしは子どもの権利条約入門ワークショップに出ました。少し遅れて入ったので、最初の方は話があまりわからなかったけど、だんだんわかってきたら、けっこう楽しかったです。

わたしは、最初「子どもの権利条約」って何かわかりませんでした。話を聞いてもいまいちよく分からなかったけど、少しは分かりました。話は〇×クイズで進められて、わかりやすく、おもしろかったです。

子どもの権利条約が国連で採択されたのは1989年11月、日本で批准されたのは1994年4月でした。今から9年前のことでした。日本が権利条約の批准をしたのは世界で156番目くらいでした。

この条約は現在、192の国や地域が批准しています。子どもの権利を大切にするための「地球規模の基準」となっているんです。

子どもの権利条約、これを守っていない人は、普通、罰を受けると思いますが、これは罰にならないのです。実際、この子どもの権利条約が守られていない国はけっこうあるんです。

私はあまりよくわからないけど、大人の人が子どものことをちゃんと考えてくれているんだなあと思いました。

【NPO法人 こどもNPO（名古屋）藤田詩織】

今回、この「子どもの権利条約フォーラム」は、11回目にもかかわらず、私は初めて参加しました。私は、少し遅れて行ったので、どんな事をやっているのかと、どんな人がいるのか、すごく不安でした。でも、私が行った「子どもの権利条約入門ワークショップ」にいた人たちはすごくやさしかったです。ワークショップでやったことはクイズで、第1問、サッカーボールを縫うのはだれかとゆうので、私は、最初大人の人だけで作るものだと思っていたのに、家族と一緒に、小さい男の子も作っていたとゆうのにすごくビックリしました。私が小さい頃は、サッカーボールをだれが作っているのか全く知りませんでした。

そして第2問。ここが中心としている「子どもの権利に関する条約（子どもの権利条約）」ができたのはいつごろかとゆう問題でした。答えは、国連で採択されたのは1989年11月のこと、そして日本で批准されたのは、1994年4月のことで、日本は国連で採択されたけっこう後にできたってゆうのがいやでした。

そして、私は子どもの権利条約について、どれだけの条約があるのか、どんな条約があるのか気になった。

全部で54条の権利条約があった。

その中で一番気になったのは、第28条（教育への権利）というので、子どもの教育への権利を認めと書いてあった。もし、教育への権利を認めていなかったらどうなっていたのかなあ〜と思いました。このような資料をもらえてすごく勉強になりました。

今回は誘われてこのようなことに参加しましたが、今度どこかで、このような事がやっていたら、自分から進んで参加したいと思っています。

【NPO法人 こどもNPO（名古屋）服部絵梨香】

え〜と、フォーラムの感想、意見を是非、とのことですが。やはり俺は青森、千葉、そして川西とフォーラムに参加しているので、特に自分も実行委員としてかかわった千葉と比べてしまいます。そうすると、感想も何もありません。ただ一言、「川西はよかった」。

何でかと言いますと、千葉は「子どもの権利条約」と謳っておきながらも、何故か『若者だ』『青年だ』という輩がしゃしゃり出てきて、何食わぬ顔をして勝手に仕切って誰よりも喋る。というなんとも不思議な会議が行われていました。意見を言うなというわけではありません。その『若者だ』『青年だ』という人達が子どもだけの会議をつくり、その会議で前文のような振る舞いをしていたことがおかしいかったです。

さて、かなり嫌な思いをしたからでしょうか。川西の感想なのに千葉の文句が出てきてしまいました。この文句は「これに比べたら川西はいい」という意味ではありません。少しだけ触れようと思ったら結構書いてしまっ。て。「千葉と比べたら千葉より悪かった」なんてところはそう無いですからね。比べたって仕方がない。そうすると文章の始めのほうで「千葉と比べてしまう」と書きましたが比べようがありません。どうやら500字を超えたようですが、「川西はよかった」としか感想を書いていませんね。これで終わらせるつもりもないので、もう少し書かせていただきます。

そうですね、最初に驚いたのは1日目の全体会に子どもがいたことですね。千葉は何かイベントをやるたびに「何で子どもが来ないんだ」とずっと嘆いているのに、川西にきたら前のほうに子どもがいましたからね。まあ、千葉は人が来ない理由なんて誰が見ても一目瞭然ですけどね。一部の人以外は。

しかし、全体会で俺が喋ったときはまいりましたね。冗談で「大人も子どもも気に入らない奴はいるから…」みたいなことを言ったら、まじめに「それはどうかと思う」って言うてくる人が何人かいましたね。冗談に聞こえなかったのかなあ？でも嫌な奴は嫌だよな。

なんと言っても一番良かったのは宿泊施設ですね。労働福祉会館でしたっけ？今までは同じ世代の人達と交流する機会なんてそんなになかったですからね。とても楽しい夜が過ごせました。たこ焼きはうまいし、中学生がやたらハイテンションにからんでくるし、できればもう一泊したかったです。

フォーラム全体を通して考えると、余計なものが少なかった気がしますね。千葉はなんか延々とわけの分からん歌を聴かされたりとかしましたから。川西はさっぱりした印象を受けましたね。だから一般…と言いますか、こういう活動に普段関わっていない人も来やすかったのではないのでしょうか。

【千葉：三森】

キモチの共感－フォーラム 2003 in 川西に参加して。

今年の冬のヒットナンバー「新大阪」を聞きながら千葉へと帰路に着く新幹線の中で、私はなんとも言えない「ワクワク感」をホクホクさせて帰りました。

なぜ、私があれほどまでワクワクしながら帰れたのか、それは2日簡通じて、フォーラム全体で

「会話する」「コミュニケーションをとる」ということを徹底して企画なされていたからだと思います。その結果、私たち来場者は「話せた」ことによる満足感をもって帰る事はできた。会話によって来場者どうしのキモチが膨らみ合って、非常に濃いものができあがったように思います。

「ケータイを持ったサル」と指摘されるように、近年は日本人(特に若者)のコミュニケーション能力の低下がさげばれています。しかし、今回のフォーラムでは、いろいろな人の世界観に触れることができた、共感できた。共鳴することができた。私たちは「ただケータイと持ったサル」ではないと確認できた。ただ対話の場がなかなかないだけなのだと。

また、今回のフォーラムは多くの子ども・若者が実行委員として企画運営に携わっている様子で、非常に「パワフル」でした。やはり「子どもの権利条約フォーラム」は「子ども・若者」の大勢の参加のもと、大人と子どもの協働(今回のタイトルでもあるように大人と子どものイイ関係)があって、ひとつのフォーラムができる、とおもいます。

非常にいい経験をさせて頂きました。
実行委員のみなさん。ほんとうにお疲れ様でした。

【千葉：山浦】

2001年青森、2002年千葉、2003年川西と3回ほどこのフォーラムに参加してきましたけど、俺的には川西のフォーラムが一番よかったなあと思います。まあ「よかった」と一言にまとめてしまうと、「どこがどうよかったのか」とか「基準はなんなのか」とか、といろいろ出てきちゃいますけど、なんか「よかった」んです。でもまあそれで終わらしたら500文字までいかないので自分なりに検証してみましようか。

とりあえず印象に残ってるところは、全体的にそこまで気持ち悪い変なムードは感じられなかったというところでしょうか。青森のときは正直もう記憶があいまいなのでなんともいえませんが、千葉はなんか『子ども至上主義』みたいな流れを感じまして。特に不登校にかんしては「ビバ不登校」とでも言い出しそうな勢いでしたからね。

あとは、子ども同士の交流の場があったってのはポイント高いですねえ。大人なんてのは、こういうのに参加する人のほとんどは自己顕示欲が高くて言いたがりの話したがりでからほっときゃいいんですけど、子どもは大半がそうはいきませんから。川西や他の県から来た中高生と過ごした一晩は、実に楽しかったです。俺的にはどんな活動するにしても、やっぱ楽しまなきゃしょうがないですからね。楽しみがあることは、非常に重要です。

さあて、もう500文字越しましたぜ。俺は自由の身。で、最後に二言三言。
今回のフォーラムは、最近活動から遠ざかっていた俺のやる気を多少なりとも取り戻させてくれました。そして、何より楽しませてくれました。またこんな機会があったら参加したいです(笑)。

【千葉：山本】

実行委員会メンバーの感想

私は、このようなフォーラム自体に参加するのが初めてで、右も左もわからないところからのスタートでしたが、フォーラムの実行委員会の一員として参加できたことを非常に誇りに思います。子どもの権利というのは、当たり前のように当たり前でないこの社会において、改めて考えさせられるフォーラムでした。

準備段階から前途多難で、本当に成功するのか、と不安が募りましたが、たくさんの人々の協力によって、大成功のフォーラムであったのではないのでしょうか。私自身、当日の全体会、分科会は、自分の仕事に追われ、積極的に参加できなかったことは非常に残念ですが、後の皆さんの感想を聞いて、裏方の仕事でもこんなに多くの人々に来ていただき、たくさんのメッセージもいただいたので、うれしかったです。

正直なところ、私自身も子どもの権利についてまだまだ勉強不足の点は否定できませんが、このフォーラムをきっかけとして、新たな人生の勉強として考えていけたらと思います。

最後に様々な人々と関わりを持たせてもらい、自分の中でも大変有意義な時間を過ごさせてもらいました。また、このような機会があることを願っています。

【大学生】

正直、あんまり目立たないこの町「かわにし」で、全国が注目？してつくられた「子どもの人権オンブズパーソン」。今回このフォーラムは、やっとふるさとに帰ってきた、と私は思った。ふるさとと言っても、かわにしよりも、もっと充実した内容の決まりが各町々にはできた訳だけでも、日本では条例としてかわにしが最初にできた町だから、この町が基点（きてん）にされているのだから、ふるさとなのだろう。

そのふるさとで、この権利条約を通じて集まった人々が2日間、共に時間を過ごし、交流をした。どの地域から来た人々も、全てが生き生きしていたように思える。その証拠に、2日とも会場が人々の熱気でとても熱かった。冬の寒い日だったのに、私の記憶には、楽しそうにゆであがった（点をつける）人々の顔が頭には残っている。

今回のフォーラムは、参加者も作る側も、ぴったりとひとつになっていたように感じた。みんなが楽しそうで、最初から最後まで、新しく知りあった人とも仲良く話げできた。

とても充実した2日間で、これは今までのどのフォーラムよりも一番ホットだったのではないだろうか。大人も子どももみんながひとつになれた空間。あの2日間こそが、「おとなとこどものいい関係」そのものだった。本当にすばらしい時間の流れだった。

今回のフォーラムは、かわにしという町の「子どもの人権オンブズパーソン」と並ぶ、またひとつの大きな誇りとなった。

【中学生】

私は今年、フォーラムの準備からお手伝いできた事がすごくうれしくて、楽しかったです。やっぱりみんなが楽しいからって思えるようなフォーラムにしたかったし、あたしにも何かできたらなって思いました。

私は当日、コーディネーターとしての役割がちゃんとできたかどうかはわからないけど、私自身がとても楽しくて、緊張とか全然しなかったです。滋賀の人たちとかみんな1回会った事あったり、また会えるのがうれしかったです。

今年の立食パーティーは、手作りのことが多くて、みんなその準備も忙しくて大変だったけど、全然知らない子にたこ焼きの焼き方教えてあげたり、それと、夜の子どもだけのお泊りは今までにない事ができたので、1番楽しかったです。

千葉の子とも仲良くなりました。

16歳、17歳のみんな高校年生ばかりだったので、すごい話もできるし、夜はずっとずっとおしゃべりして寝れなかったけど、本当に会ったばかりやのになんでも話せました。

2日目の分科会は、ずっと前から何を話題にしようかずっと考えてきた事なので、やっぱりいっぱいの人が話を聞いてくれてうれしかった。予想以上の人がネットのところに来てくれて、本当に感動しました。小学校の時の先生とか何人か来てくれて、声をかけてもらったこともびっくりしました。

私は、このフォーラムが成功だったと思います。

準備の段階から、携わってきた色んな人が子どもの意見を多く取り入れてくれて、ちゃんと話を聞いてもらえたこと、子どもの意思表示がちゃんとできたと思います。また、大人の人の優しさが伝わってきました。

このフォーラムに関わった全ての人、ありがとうございました。

【高校生】

私にとって権利条約フォーラムは当日の2日間と同じぐらい前日までの日々が印象的です。当日は雑用に追われていたということもありますが、準備期間における各団体や子どもたちの姿が忘れられないということがその理由です。

フォーラムでは普段はそれぞれの目的や主旨が少しずつ違う活動をしている団体が集まります。各自の団体が自分たちのアピールをしつつも、一つのことを共通の信念に向かって成し遂げようとしていく過程で、試行錯誤がとても大変だったと思います。しかし、それが視野を広げ、お互いを知り合うきっかけになったことをとても嬉しく思います。今回の川西でのフォーラムは「子どもたちが中心となって作り上げたところが良かった」という感想を多く聞くことができました。子どもは守られるだけの存在ではありません。子どもネットの「しゃべり場」でも子どもたちにその内容や作業を任せたことが成功の大きな要素であったと思います。そして、全体会のグループディスカッションという子どもと大人が対等に話すことのできる場の経験は子どもにとっても大きな自信になったと思います。緊張しながらも一生懸命話す子どもたちからの本音の言葉に、

私も共感する気持ちでいっぱいでした。

このフォーラムのような取り組みを一步一步進め、今回のテーマ、みんなで話そう・やってみよう“子どもとおとなのいい関係” そんな気持ちがどんどん広がっていく川西でありたいと感じた二日間でした。

【大学生】

子どもの権利条約フォーラム 2003 in かわにし。これは5年間くらい子どもネットに参加していた私にとっても、一番大きな行事でした。今まで福岡・東京など行く側だったけど今回は川西という兵庫でもあまり知られてない場所でやることになって正直最初は信じられませんでした。だけどすごく楽しみでもありました。それは私の暮らしているこの川西に子どもの権利を考えるたくさんの人達が集まっていろいろなことを話し合えたりするということだからです。実行委員の話し合いなどにも参加し、夜遅くに家に帰ることも多くなりました。その度、何で明日学校あるのにこんなに遅くまでここにおらんとあかんねんやろ、とか思ったりしました。眠くて話し合いで寝そうになってしまった事も何回もありました。だけど話し合いで大人の人に意見をきかれてやっとわかりました。私は母・姉が行くから私も・・・という思いが自分にあったんだと思います。だけど私が話し合いに参加する本当の理由は「自分の意見をだしてこのフォーラムを成功させたい」でなければならないんだとわかりました。当然のことだけど自分の意見を聞かれてそれがちょっとでも話し合いにつながった時、嬉しくてもっと意見をだしたいと思うようになりました。だけどやっぱり大人の会話は難しくてついていけないことも度々。そんな時、かわにし平和キッズのメンバーの子が「これどういう意味なんですかー？」と大人の人に恥ずかしがらず聞いていました。それを見てすごい勇気だな、と思いました。たしかにわからないままいるより聞くのが一番だと思いました。大人の人たちも優しくわかりやすく説明していてすごくうらやましく思いました。だからこれからこういう機会があったときは恥ずかしがらず聞いていこうと思います。

ビラ配り。誰も受け取ってくれない（涙）すごくショックでした。ちょうど会社帰りなどで駅がにぎわってるころ。だけどみんな電車に乗り遅れるといけないということですから早く通り返り過ぎていってしまいました。みんなでバス停で待ってる人だったら時間あるんちゃう？とかいろいろ考えて配ったりしました。同じようにティッシュ配りをしている人がいて「がんばれ！」と声をかけてくれたりしました。すごく嬉しかったです。そのビラ配りの後から私達は街でビラ配りとかティッシュ配りとかしてる人がいたら絶対受け取ろう！と誓い(?)ました。(笑)

いよいよ本番、すごくたくさんの人々が参加してくれました。夜は子どもだけで交流したりしました。友達がたくさんできました。神戸フリースクールの子、遠い神奈川県・滋賀県の子などいろいろな地方の子と同じ宿舎にとまり、仲良くなれました。学校が違う子だからできる悩み事とかいろいろ話せました。すごく楽しい日になりました。次の日の私達の分科会「しゃべり場」は

ほとんど大人が 10 人～20 人程度きてくれましたが子どもがきてくれなくてショックでした。が！！！！なんと午後から 50 人もの人がきてくれました！その中には同じ宿舎にとまった神戸の子とかいろんな子がきてくれました！すごく嬉しくて話す内容も自然にはずんだ気がしました。最後は「楽しかったよ」とか「子どもネットのビラはないのかな？」とか来てくれた人達が声をかけてくれました。緊張と嬉しさでちゃんと喋れてたかわからないけど自分が主催者になるといのはこういうことなんだ、と改めて感じすごく嬉しかったです。

私を子どもとしてじゃなく、同じ子どもの権利について考えてる人として意見を聞いてくれる大人の方々、住んでいるところが違ってもこのフォーラムを通してできた友達。私はとても素晴らしい人たちに会える事ができました。もう終わってしまった事、ではなくフォーラムを通して感じた事、学んだ事を大切に子どもネットという団体で私なりに子どもの権利についてもっといろんな人と話し合い自分の思いを伝えていきたいです。そしていつか、また神戸や滋賀や神奈川の子達と会えたらと思います。

今回のフォーラムでも言ってる人がいたけどこういうフォーラムに来る人はもともと子どもの権利について考えている人たちだから、私達が想いを伝えたい“子どもの権利についてあまり同意できないような人たち”はきません。だから私は今はわからないけど、みんなで話し合って何らかの形で学校の先生とかに私達が考える想いを伝えたいと思います。そういうことを子どもネットとかで考えていきたいなと思いました。

【中学生】

今までこのような活動の存在や内容を知らなかったので、今回参加したことによって自分の知識や世界が広がって本当に勉強になりました。シンポジウムの質疑応答で大人が意見の言い合いをしていて、それが子供たちにとっても「自分たちのことをこんなにちゃんと大人は考えてくれてるんだ」と思える機会になっていたのではないかと思います。小学生の参加者もいて、そんな歳から色々な地域に住む人々と交流する機会に恵まれていて少し羨ましかったです。【大学生】

全体会準備のプロセスで学んだ子ども参加支援

浜田 進士（子どもの人権ファシリテーター）

1 はじめに ～カムバック・フォーラムですねん！～

2003年5月最初の実行委員会の出席したとき、私はそうとう緊張していた。久し振りに会う人たちとなんて言って挨拶していいかわからなかった。私は1994年～1999年までこのフォーラムにNGOのスタッフとして関わっていたが、その私の活動に対して責任を問われ、しばらく遠のいていたからだ。子どもの参加支援にしても、「私には支援する力がないのではないか」と考えたこともあったが、その自分の失敗を活かして、自分の周りにいる子どものエンパワーメントにつながっていきたいとの思いと、子どもにとって大切な川西子どもオンブズパーソン制度を市民として支えたいとの願いからフォーラムにかかわった。全体会の準備プロセスで学んだ「おとなと子どものいい関係」について述べてみたい。

2 子どもNPOと子ども当事者と自治体というめずらしい組み合わせ

フォーラム11回目にして事務局が自治体になるのは初めてだった。これまでは地元の子ども関連NPOが中心になって実施してきたので、分科会を担当する団体も諸経費は自分たちで持ち出しということを前提に話し合いを進めていた。しかし、今回はフォーラム実施の際の役割と責任の分担が曖昧なまますすめてしまい、フォーラムに近づくにつれて、各団体が事務局に依存していたのではないかということに気づき、10月半ば頃から事務局にも積極的にかかわるようになった。結果的に子ども当事者と子どもNPOと自治体のいい協働関係が生まれたかな？と感じている。とくに全体会の進め方や子ども参加のあり方を巡って夜遅くまで事務局会議をしたことで、子ども支援の差異を確認し、共通理解をつくることにつながった。

3 いったん子どもとのパートナーシップが崩れる！

チラシの作成と広報作業が大詰めを向かえる段階で、実行委員会の子どもたちとも関係がギクシャクしだした。6月～8月頃までは、全体のデザイン、テーマなど大枠を決める作業は月1回のペースで子どもとの話し合いもうまくいっていたが、決定事項が細かくなってくると議論する時間が足りなり、夏休み明けから試験やバイトなどで欠席する子どもが増えてきた。具体的なプログラム作りの時点でおとなと子どもの思いが明らかに乖離したと感じた。ここに来て、実行委員会の間で、子ども参加の位置付けと目的が明確でない部分が見えてきたり、子どもが関わる

ことのできる範囲を明確にしておかなかったりしたことが露呈した。おとなの土俵に子どもを無理に引っ張って意見を聴いても自由に気持ちを言えなくなるのではないかとちょっとやばくなってきた。

そこで全体会の準備に際して、子ども参加をサポートする担当チームをおき、子どもとの調整などの役割を決めることにした。また、全体会をすすめるにあたって、子どもとの意思決定の手続きを明確にし、できるだけ情報共有と合意形成のプロセスを大事にしようと話し合った。具体的には子どもたちに会議の日程をきちんと伝える。会議の場や時間帯を子どもたちが参加しやすいものにする。決まったことを子どもにわかりやすく伝える、前回欠席した子どもにあわせて話し合いを進める。携帯メールやホームページの掲示板など子どもがアクセスしやすい情報ツールを活用するなど。事務局の伊美さんにはさっそく子ども専用の掲示板を作成していただいた。(助かりました！)

4 全体会企画における子どもとおとなのパートナーシップの再構築？

子どもオンブズクラブで、全体会を担当する子どもネットの北井さん(高2)や澤田さん(中3)たちと話しているうちに、「報告してくれる子どもゲストには、普通おとなに対して行っている事と同じことを準備段階でしよう！」ということになった。子どもゲストとはできるだけ直接会いに行き打ち合わせをする。子どもにわかりやすい言葉でねらいや内容を伝える。おとなと子どもの企画担当者との信頼関係をつくる。

さっそく、ぼくと横井さんは神戸フリースクールを夕方訪問して、大森さんたちと打ち合わせを行った。川西の子どもの思いを伝えると共に、主催者側が気をつけてほしいことやこれまで大きな会場で話していやだったことなどを聴き、2日間の全体の流れをしっかりと理解してもらったうえで、ゆっくり自分なりの文章を作ってもらった。神戸の子どもたちは、少し不安感を持っていたが、当日は不登校のきっかけとなつたいじめのことなどをしっかりと語ってくれた。ただ、遠方の多治見や川崎の打ち合わせは十分にできなかった。

5 全体会は「苦痛」？「忍耐」？

子ども担当チームのメンバーの中には、これまでのフォーラムのあり方に何となく違和感も持っているものもいた。たとえば、昨年、千葉の子どもたちのメッセージに「全体会を退屈なものにしたいくない、子どもにとっては苦痛」が頭をよぎって、事務局ではこの言葉をどう受け止めるべきか議論となった。

伝統的な価値観では「子どもには忍耐も必要やで！」と処理されて終わるが、結局十分おとなの間で議論しないまま、数年間が過ぎてしまったのではないだろうか。

「結果としてはうまくいかないかも知れないけれど、参加する子どもたちから聴き、議論する中で、実のところ、突き詰めた内容とメッセージの質が出せるのであれば、子どももおとなも自ずと参加しよう（その場を 一緒に引き受けていこう）ということになるのではないか感じた次第です。だから、『苦痛 or 忍耐』→『内容の吟味』へ、僕のなかでもう一步進んでいかないと一晩考えていました。それはまさしく、本当の意味での子どもとおとなのいい関係にも関わることに思います」（横井さん）

この発言は、ぼくには大きなヒントと刺激になった。

6 次々とでてくる子どもたちの提案！

「全体会がどうしたらお互いにとって面白くなるか聴かして！」子どもオンブズクラブの会議で、私や横井さんが聴くと子どもたちからは次々と意見が出てきた。

「最初のアイスブレイキング。寒くなるからやめてほしい」「川崎や多治見の子どもたちと当日までにもっと知り合いたい」「掲示板やホームページのこともっと伝えて」「もっと子ども同士の実質的な交流がしたい」「夜の交流会はお酒はやめて！たこ焼きを作りながら子ども同士が話しくしてほしい」「子どもたちでフォーラムのあとも交流するために1日目の夜に交流合宿をしたい」「グループで話し合ったことをひもで吊り下げて共有したい」とにかく当日までギリギリではありましたが、おとな同士が子ども参加のために議論し、子どもとおとながよく話し合った。11月に入ってから、学生や若い人たちの参加意識がどんどん上がっていった。それと事務局長の澤田さんのサポートもあって、直前の実行委員会は子どもたちが真剣に打ち合わせに参加していた。

7 子どもとのプロセス重視か結果重視か？

当日が近づいてくるとおとなに焦りの感情が出てくる。おとなには子どものドキドキ感や不安感が見えなくなる。全体会の細かいタイムスケジュール、子どものわかりやすい司会原稿の作成、そして司会の練習。「帰宅が遅すぎる」と心配して、夜の会議への出席に反対する保護者や支援者。いいステージにしようと直前にプログラムの変更を依頼するおとな。

この頃感じたのは、子どもの支援といってもおとなの支援の仕方は千差万別であると改めて感じた。いい形のフォーラムを作り上げるか、いい関係でフォーラムを迎えるか、よく似ているようで全然違う。「おとなと子どもの関わり方」の相違を認めつつ、合意をどう作っていくか？今度の課題だと思う。

8 子どもサポーター向けの資料作成と打ち合わせ

今回、全体会でグループディスカッションをするにあたり、「子どもサポーター向け資料」を配布し、担当してくださるサポーターへの説明会を実施した。これは私の失敗の経験を元に作成したものだが、多くは平野裕二さんや黒河内政行さんから学んでいる。

子ども参加の注意事項として「子どもの感情表明を大事にする」とともに、心理的負担へのケアを十分に行う」というものがある。フォーラムに初めて来た子どもが、どんな思いをもって参加しているのか、いきなり多くのおとなに囲まれて意見を言わされるのはどんな気持ちなのか想像してみたい。子どもネットの提案もあり、グループの話し合いは子どもとおとなを3人ずつにすること。グループにはおとなの発言に子どもが傷つくことがないように子どものサポーターをおくことが決まった。当日は予想以上に参加者が多くて、サポーターが入れないグループもあり、反省している。でも、参加してきた子どもたちにそうした支援の姿勢を伝えることはできたと思っている。

9 出会ったNPOでゆるやかなネットワーク作りを

とにかく、フォーラムは終わった。フォーラムは、

- 【1】子どもとおとなのいい関係というテーマにそった内容だったのだろうか？
- 【2】参加した子どもたちはどのような感想をもったのだろうか？
- 【3】フロアからのおとなの発言に対して子どもたちは不快な感情を持たなかっただろうか？
- 【4】その「みせかけの」優しさや配慮が子どもの人権をかえって奪ってはいないだろうか？
- 【5】子どもの関わり方において子ども観との一致やズレや共感、違和感があったのだろうか？
- 【6】子ども同士の実質的な交流はできただろうか？

という気持ちでいっぱいだった。

わからない！でも今後このフォーラムで出会った子どもNPOの人たちとゆるやかネットワークを作り、子どもの権利や参加支援の議論を続けていきたいと思う。

千葉の山浦くんたちの次のような発言に応えるためにも…。

「子ども参加とは気持ちを形にすることです。でも、その前に気持ちと気持ちをつなげることが必要じゃないでしょうか？おとなへ！子どもたちともっともっと議論して欲しい！」

「子どもの権利条約フォーラム 2003 in かわにし」

の事務局体験記

子どもの権利条約フォーラム 2003 in かわにし 実行委員会

事務局長 澤田 裕子

この報告をするにあたり事務局としてやってきた事を振り返る時、まっ先に思い出すのが、昨年の初め『子どもの権利条約フォーラム 2003』の開催地が川西に決定したと聞いた時のことです。言葉にすると「とうとう来たか」でしょうか。とにかく身が引き締まる思いがしたものです。

1998年の福岡でのフォーラムに初参加して以来、毎年、各地でのフォーラムに川西の子どもメンバーたちと参加させてもらっていました。そのたびにたくさんの学びという収穫をいただいて帰っていましたが、その状況を作ってくれた開催地の忙しさやご苦労ぶりは想像に難くないものがありました。参加者としてお客さんになるだけでなく、いつかは川西も迎える立場になるだろうといった覚悟があったことも事実です。しかし、まさか自分に事務局長の役割が割り当てられようとは、予想外のことでした。

実行委員会が立ち上げられたのが5月17日の事でした。当初は準備会として呼びかけられた実行委員会でしたが、委員長を上杉先生にお願いし事務局長はかわにし子どもネットの誰かが担当しようという形になりました。席上で『…2003in かわにし』か『…in 兵庫』または『…2003in 北摂』か、という案が出たとき、出席者の多くの方が強く川西を支持してくださったことがうれしかったと記憶しています。兵庫県全体はあまりにも大きすぎる範囲のイメージがあるし、北摂というのも地域的なずれがあるし、という理由も大きかったのですが、皆さん『かわにし子どもの人権オンブズパーソン制度』に逆風が吹いている事を敏感にとらえて下さっていて、こんな今だからこそ『…in かわにし』がいいのでは、という方向でこの実行委員会は進み始めました。

日時と会場と日程との3点はすでに準備されていたのですが組織や運営は一からです。定例の実行委員会のほかに、複数回の勉強会や互いの団体の発表会が提案されました。しかし問題は全体のコンセプトです。大筋は毎年もちろん「子どもの権利条約を生かす」なのですが、全体会の基本構想を開催地の実行委員会が話し合って決めるプロセスが重要なポイントとなります。川西で活動している子どもたちの意見の反映が何より重要でしょうし、参画団体の皆さんの意見が一つにまとまって生み出されていかなければ集まる意味がなくなります。やっぱり大変そうだと腰が引けそうになった頃、「澤田さん、事務局長に…」との打診がありました。

職場での状況を考えるとためらいが残りましたが、現地のメンバーそれぞれが可能な仕事を分担するしかありません。長い間『かわにし子どもネット』と一緒に活動してきた人間としてできることをしよう、状況は厳しいけれど必ずしも不可能なのではない！と、と思いました。

6月4日の2回目の実行委員会は17の参画団体が集まってくださって開かれました。それぞれの参画団体から活動状況の紹介をしてもらったあと、企画案を話し合います。大きくは第1日目に全体会、第2日目に分科会をする事にしてとにかく全体会を実行委員会が作り上げていこうとしていた頃でした。前回も出ていた意見ですが「子どもとおとなの対話」を試みていこうという方向性は変わらなかったように思います。しかし、現実のプランに関しては、事務局からの提案をたたき台として実行委員会で調整をするという状況でした。

- ・子どもとおとなと一緒に作る全体会とする。
- ・一般参加者の発言が活発にできる配慮をする。

こういった意見を反映したプランを具体化していこうと第3回目が開かれたのが7月19日でした。全体会にシンポジウムをする事にはまとまっていたのですが、テーマに関しては意見が分かれました。『子どもと一緒にしてきた事・おとなと一緒にしたいこと』と提案されたのですが子どもたちからの賛成が得られません。「おとなと一緒に何かしたいと思っていない」そうです。事務局はがくっ…でも気落ちしてシュンとしている場合じゃない。代案を何とか探しているいろいろ提案するのですが、結局次回に持ち越しとなりました。

分科会については会場設定の関係上、意思確認の期限を7月28日までとして各団体に申し出てもらうようにしました。実際、次の8月3日に開かれた第四回実行委員会には16の分科会企画が上がりました。基調講演は喜多先生に11年間を振り返っていただく、シンポジウムのコーディネーターは荒牧先生にお願いしよう、全体進行の司会を浜田さんにお願いしようなどと少しずつイメージが見え始めたような気がしていましたが、全体会のテーマはまだもめていておとなと子どもの合意に至っていませんでした。

夏休みだった事もあって4回目から5回目の間に、子どもたちとの話し合いの機会を多く持つようにして9月6日の実行委員会にはテーマの設定をして臨む事ができました。

ーみんなで話そう・やってみよう“子どもとおとなのいい関係”

～子ども×おとな＝互いが元気になる、をキーワードにしてー

どうです、ちょっといいでしょう。

各地の子どもとの交流を中心に据えて、予定されていたシンポジウムの内容も徐々に子どもの発言を中心に聞くほうがいいという方向に変わっていきました。粘り強く会議に参加し続けた子どもメンバーたちの力だと思います。

第6回実行委員会は10月11日に2日目の会場として使わせていただく川西小学校で行われました。実行委員会全体で下見もすることができました。しかし、賛同団体への配布物や依頼の不足、そして予算計画やスケジュール作成の遅れなど、事務局としての力不足がこの実行委員会で

は問題になったと思います。権利条約ネットワークの天野さんや、大阪事務局の木村さんや、全体を通して相談役を努めてくださった浜田さんたちはこの時ほど危機感を募らせた事は無かったそうです。この後、ご提案をいただいて事務局会議を頻繁に持つようになり何とか最後まで乗り切れたのではないかとといった感があります。感謝は言葉に尽せません。

第7回11月8日、第8回11月30日と予定されていた実行委員会だけでは到底追いつかず、臨時実行委員会が11月22日に開かれたり事務局会議や下見や実務のために集まったりしていました。賛同金の不足が深刻だという事で、個人的に日本アドラー心理学会へお願いして協力を得たりもして、直前2ヶ月ほどは怒涛のような日々を過ごしていました。しかしその分、事務局や実行委員会のメンバーたちとの一体感は強まっていったと覚えています。

そうしてピンと張りつめたような空気の中で当日を迎えました。私自身も緊張と興奮を強く自覚していましたが、周りのどの人の顔を見ても似たようなものです。みんなの気持ちがフォーラムの実行という一点に集中して向かっていたのです。

具体的な全体会のプランではパート1とパート2に分割する事になり、最初は司会をお願いするはずだった浜田さんには後半のコーディネート役をお任せしたので、全体会の司会を私が引き受けていました。これがまた内気な私にはプレッシャーで…？

ともあれ、どのくらいの参加者が来てくれるのだろうという不安と、司会役の緊張で開始時間を迎えました。私のいる舞台の上からは会場全体が見渡せます。開始と同時にまばらだった会場がどんどん埋まっていきます。わあ、すごいと思う間もなくみるみる満席となり、ボランティアのスタッフが走り回って予備の椅子を運んでいます。最終的には、約1000人のもの来場者を数えることができました。日頃関心をあまりもたれていないのではないかと思っていた子どもの人権問題でしたが、うれしい方向に予想が外れ、事務局も実行委員会も哑然としたことでした。もちろんみんなで激しい高揚感に包まれていたことは言うまでもありません。

寒さにふるえながら駅前でビラ配りをした子どもメンバーも、手作りビラを片手に来場してくれた子ども参加者がいたことを聞いて「うっそ！カンドー！！」だったとのこと。

そして夕方手作り交流会で盛り上がり、子どもメンバーたちは同宿して交流したいという念願を果たし、予想(心配?)した通り、寝不足に目をこすりながら分科会に臨んだようです。

2日目の分科会もたくさんの来場者があり、最後の全体会ではどの分科会からも活発な活動報告がされました。各分科会はどこも参画団体として一緒にこのフォーラムを作ってくれた人たちです。一つの報告が胸に残り、これからもつながって子どもの催しをネットワークしていける絆を確信できた事が喜びです。

力不足な事務局長としての反省はいくら言っても尽きそうにありませんが、フォーラム全体の成功に寄せていただいた皆さんの力を忘れません。今後も川西では『ポストフォーラム』としての活動を、この素敵な仲間たちと続けていける事になりました。微力ではありますが、ここ川西の地で子どもの人権に関する役割を果たしていきたいと思っています。

賛同人 一覧

(敬称略・五十音順・2004年9月1日現在 187名)

青木 正三	澳津 麻里	坂本 保子	中川 恵美子	松山 幸江
朝田 健三	尾下 葉子	佐藤 秀樹	仲田 隆明	松山 恭子
朝田 早苗	織田 克己	澤嶋 真紀子	中村 勝彦	真船 典子
阿部 道子	落合 秀之	澤田 裕子	中村 たづみ	三井 ハルコ
天野 隆	小畑 利宏	重信 京美	西山 正樹	三浦 美枝子
新井 はるみ	表 正恵	下垣内 順子	西垣 由加子	水野 篤夫
荒木 雅子	笠原 征郎	住友 剛	野田 俊作	南 隆志
荒牧 重人	片山 ひろこ	瀬戸 則夫	萩原 久美子	峯岸 赫子
飯田 紀彦	加藤 久子	背戸 公子	長谷川 重夫	宮崎 繁樹
井川 恭子	鎌田 満子	十川 重美	長谷部 真琴	宮本 博文
池淵 佐知子	川井 浩子	菌部 眞哉	畑中 景子	宮本 ひろ子
石田 文三	川口 聰	曾野 繁美	服部 千春	宮脇 幸美
石田 美樹	川端 利彦	高井 孝子	服部 宗和	望月 和子
井関 建治	瓦野 伸子	高木 正	浜田 進士	森 まり
乾 恵子	神原 文子	高橋 裕美子	林田 鈴枝	森 実
井上 寿美	北 千加枝	高橋 九二子	平野 かおる	森田 明美
井上 ゆかり	喜多 明人	高橋 哲	平野 圭祐	森永 裕文
忌部 淑恵	北上 哲人	高橋 さと子	廣田 章年	森山 順子
今福 三津枝	北上 弘美	高柳 洸治	深江 誠子	柳本 つとむ
岩崎 長久	北風 洋子	竹原 典子	深野 雅久	山内 洋
岩堂 美智子	木村 恵子	田中 文子	福田 みのり	山内 美代子
上杉 孝實	木村 修作	田中 禎	福本 久代	山川 浩司
上田 敏幸	清野 加奈子	田中 晴美	藤井 幹夫	山口 岳夫
植野 優一	清野 雅子	谷 安生	藤井 浩子	山下 裕子
内田 塔子	久賀谷 洋	田家 文衛	藤木 一郎	山田 恵
江川 みえ子	日名 將雄	千明 朋代	藤木 武夫	山中 孝子
江川 協子	國家 順子	都築 正明	藤代 晶子	湯浅 雅子
逢坂 賢一	久保川 泉	柞磨 道子	藤原 志津子	由良 和美
大内 千秋	久保田 廣志	津崎 政生	本郷 仁視	横井 真
太田 理恵	黒河内 繁美	手束 光子	本多 恵子	吉田 洋子
大塚 裕子	河野 明美	戸井田 克己	前田 満	吉永 省三
大野 民雄	河野 猪太夫	堂見 和子	前中 豊	吉永 啓子
小笠原 由季恵	好光 紀	時川 典子	牧野 直子	吉永 妙
岡本 匠	後藤 るみな	富永 尚志	増田 京子	和田 真也
岡本 敬子	小林 有紀子	富永 賀子	松尾 文子	出井 美智子
小川 和寧	小宮山 健治	中 愉美子	松永 茅光	匿名 4名
奥田 清子	酒井 朋子	永井 憲一	松村 弘行	

賛同団体 一覧 (敬称略・五十音順・2004年9月1日現在 60団体)

あしたをひらく女性の会	自治労阪神淡路ブロック共闘会議
ういんぐ	自治労兵庫県本部
NGO未来の子どもネットワーク	社団法人子ども情報研究センター
NPO法人SEAN	杉並生活者ネットワーク子ども部会
NPO法人女性と子どものエンパワメント関西	高槻市政を革新する会
大阪子どもネットワーク	たじみ子ども会議(子どもスタッフ)
大阪府教職員組合	「千葉県子ども人権条例」を実現する会
大阪府青少年会館等教育施設連絡協議会	千葉こどもサポートネット
大阪北摂YMCA	ちびすけランド共和国
学校災害から子どもを守る全国連絡会	チャイルドライン@ふくおか
川西川辺教育センター	特定非営利活動法人
川西子ども人権ネットワーク	アークス仏教国際協力ネットワーク
CAPきのくにわかやま	特定非営利活動法人関西こども文化協会
CAPセンターJAPAN	特定非営利活動法人
CAP西大和	チャイルドライン支援センター
CAPプロジェクトやお	豊中子どもの人権・文化フォーラム
神戸市教職員組合	豊中市教職員組合
神戸フリースクール	西宮市教職員組合
国際子ども権利センター	日本アドラー心理学会
子ども・女性・高齢者・障害者の人権ネットワーク	非暴力ねっとわーく
子どもの居場所づくりをすすめるプロジェクト	兵庫映画センター
子どもの権利条約@ふくおか	兵庫県教職員組合
子どもの権利条約ネットワーク	兵庫県教職員組合伊丹支部
子どもの権利条約東京市民フォーラム	兵庫県教職員組合川西支部
子どもの情報誌EFC	部落解放同盟大阪府連合会
子どもの人権連事務局	部落解放同盟兵庫県連合会
財団法人大阪府人権協会	北摂こども文化協会
さんだCAP	みのおCAP
さんだ子どもの権利条約を考える会	民族教育文化センター
自治労大阪本部	めぐろチャイルドライン
自治労川西	

協賛団体 一覧 (敬称略・五十音順・2004年9月1日現在 11団体)

明石書店	三省堂
あかね書房	草土文化
エイデル研究所	日本評論社
大月書店	北樹出版
子どもの権利条約福岡総合研究所	ポプラ社
財団法人浪速振興会印刷局	



子どもの権利条約フォーラム2003 in かわにし レポート

発行日：2004年10月1日

発行者：子どもの権利条約フォーラム2003 in かわにし 実行委員会

発行所：子どもの権利条約フォーラム2003 in かわにし 実行委員会

〒666-8501 兵庫県川西市中央町12-1

川西子どもの人権ネットワーク事務局

TEL：072-740-1247 FAX：072-740-1233

Mail：kkodomo@ares.eonet.ne.jp

<http://www.eonet.ne.jp/~kawanishi-kodomo/forum2003/>

編集委員：宮本 隆宏 ・ 伊美 聡 ・ 澤田 裕子 ・ 津崎 政生 ・ 横井 真

関わっていただいたすべてのみなさま



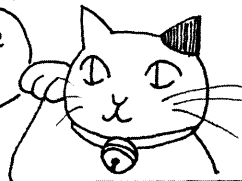
12月6日(土)

アステホール
(アステ川面6階)

12月7日(日)

川西市立
川西小学校

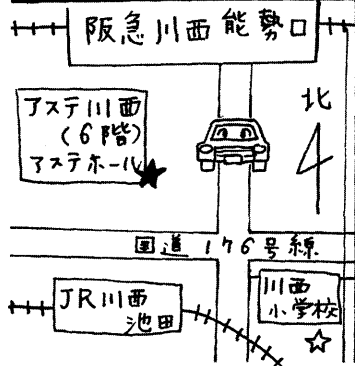
Come on!



子ども・のけんりじょうやく

フォーラム

2003 かわにし



12月7日(日)
分科会: 16コのいろんな知識
いつも思っていることについて
話してみよう!
みんなで興味のあるところへ
行ってみよう!
☆子どもがつくる
「しゃべり場」をぜひ来てね。

12月6日(土)

全体会: 「子どもとおとなの
いい関係って
なんだろう?」
各地の子ども
たちからの報告

子ども×おとな=元気になる!

いろんな
子ども・おとなと
交流しよう!

(上のチラシは、フォーラム前に実際に配布されたものです。)